

アメリカに未来はあるか

Andrew Delbanco, *The Real American Dream: A Meditation on Hope*

星野勝利

本書は、コロンビア大学で人文学を教える著者が、ハーバード大学で行なった特別講義を書物にしたものである。本として読まれることを考慮して一部手を加えてあるとはいうものの、基本的に講義として読まれた原稿をそのまま書物にしたものである。

講義のテーマはアメリカ文明史である。アメリカ合衆国の文明の歴史を通史的に概観するものである。ただし、著者の主たる関心は、現在のアメリカ人の心のありように目を向けること、すなわち、人々の心の中に現在生じている喜びや悲しみ、不安や恐怖などを、アメリカの過去の歴史との関連づけ、その上で未来に目を向けるというものである。きわめてアメリカ的な、現実的視点を持つものである。

現在と過去を眺めるにあたり、著者まず *Democracy in America* の著者 Alexis de Tocqueville のことばに注目する。1830年代のアメリカ社会を観察したフランス人 Tocqueville は、アメリカ社会に内在する奇妙な現象を指摘した。デモクラシーの制度のもとで豊かな生活を手に入れた人々の、心の奥に巣食う strange melanchory である。Tocqueville によると、この理由は明白である。平等な社会の中で人々が求めている現世的な繁栄や幸福は、人間の心を最終的に満たすものではなく、実体のない幻想に過ぎないからである。

この melanchory は、著者によると、アメリカ文明に特徴的なものである。植民地時代から今日に至るまで、アメリカ人の心の奥にずっと巣食ってきたものである。これは現在も例外ではなく、もの思う人々 (reflective beings) を強く悩ませてきているものである。植民地時代の詩人 Michael Wigglesworth のことば disrested も、Mark Twain の fantod も、Herman Melville の hypo も、R.W. Emerson の lethargy も、すべてアメリカ人特有のこの心のありようを示唆する。

melanchory とは、語源的には、*melanos chole* (black bile, 黒胆汁) である。ギリシャ人は、黒胆汁の欠落が人間を melanchory へ導くと考えた。しかし Graham Green によると、melanchory とは、logical belief in a hopeless future である。Lionel Trilling によると、the diminution of belief in human possibility である。著者もまた、

このような視点で melanchory をとらえる。この melanchory から心理的に解放されるためには、未来や可能性に対する何らかの hope を必要とする。アメリカ文明は、この意味での hope と深く関わる。

著者は、アメリカ文明を三つの時代に区分する。第一の時代は、植民地時代から19世紀中ごろまで、第二の時代は1960年代ごろまで、そして第三の時代は、現在である。区分された三つの時代には、それぞれキーワードがあてはまる。God, Nation, そして Self である。God の時代とは、melanchory からの解放をキリスト教の God に求めた時代である。この神は、自己否定を強く求めるカルヴィン主義の神であったが、人々はここに hope を見た。自己に絶望し、他者とのつながりの中に生きること true hope を見た時代である。

これに続くのが、南北戦争から世界大戦、さらにはヴェトナム戦争までを含む時代、すなわち Nation が hope となった時代である。この時代のシンボルとなるのは、国家の統合と個人の尊厳を強く求めた Abraham Lincoln であるが、*White-Jacket* で Melville が記すことばは、この時代の hope の内質をよく伝える。世界を導く自由の箱舟として自分を眺める選民意識に裏打ちされたものである。

We Americans are the peculiar, chosen people —? the Israel of our time; we bear the Ark of the Liberties of the world.

1960年代以降のアメリカでは Self が支配的である。著者によると、時代とともに縮小化を重ねてきた hope は、現在ではほとんど消えかかっており、いわば消尽点に達している。その消尽点に現れてくるのが Self である。社会にも、メディアにも、キャンパスにも、これはいたるところに認められるものである。この状態は、かつて Tocqueville が19世紀アメリカ社会に見たものとそのまま重なる。すなわち *strange melancholy in the midst of abundance* である。これを克服するには新たな hope を探り出す必要がある。現在のアメリカの人々、とりわけ歴史や文学に関わる教師や作家は、そのための努力を可能なところから始めなければならない。これは *let us do what we can to rekindle the smouldering nigh quenched fire on the altar* という Emerson のことばを実践することでもある。

本書は、一種の「エレミヤの嘆き」である。現状を憂い、現状を嘆く書である。しかし、未来を眺める著者の視座は、必ずしも悲観的なものではない。アメリカ人特有の *fairness* と *decency* の感覚が依然として健在であることを、著者は信じる。これが健在である限り、新たな *faith* がそこから生まれ、それが新たな hope へとつながる可能性がある。これが著者の最終的立場である。

本書は、大部の書ではない。しかし、きわめて示唆に富み、かつ刺激的な書である。切り口のユニークさもさることながら、広い目配りと洒脱な語り口もまた魅力である。歴史や文学の世界が自在に言及され、新聞や雑誌の世界も分析され、野球や映画のことも話題になる。時々ユーモアがまじる教室の講義を、書物を通して聞く楽しみを教えてくれる書である。

(Harvard University Press, 2000, 143pp., \$14.00)

(岩手大学教育学部英語教育講座)